

NEWSLETTER

Jun. 2016 NO.50

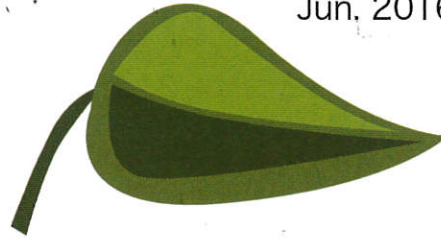
発行：特定非営利活動法人リカバリー
〒065-0031

札幌市東区北33条東15丁目1-1
エクセlemビル4F

電話(011)374-6014 FAX(011)374-6041

e-mail recovery@phoenix-c.or.jp

HP <http://www.phoenix-c.or.jp/~recovery/>



「社会的包摂と薬物政策、そして“若草プロジェクト”」

特定非営利活動法人リカバリー 代表 大嶋栄子

気がつくと、私の周りではすでに6月になっていました。おかしい。この間お正月でしたよね。毎日が飛ぶように過ぎていきます。というわけで、賛助会員と関係機間のみなさま、長い間のご無沙汰をお許しください。

この間にあった様々をざっとご紹介します。年明けごろから春にかけてグループホームのメンバーたちの入退去が続き、スタッフは「引っ越し屋さん」と化して様々な作業に忙殺されました。また「トラヴァイユ・それいゆ」通所中のメンバーの何人かが調子を崩して入院したり、あるいはアルバイトが決まり卒業していく人がいたり様々な変化がありました。

「トラヴァイユ・それいゆ」では複数の作業をおこなっていますが、お干菓子の箱詰めやDM発送作業がコンスタントに入り、従来のビーズアクセサリや刺繍、織物といった作品の製作と販売を合わせると、メンバーは忙しい毎日を過ごしていました。

3月末で道庁の障害福祉課へ届けていたお弁当事業が終了し、5月からは大嶋が非常勤で勤務している札幌刑務支所(女子刑務所)の職員向け弁当がスタートしました。また、就労準備への新しい取り組みとして、お弁当の注文をいただいた前日にスタッフとメンバーで「下ごしらえ」の作業を新たに始めました。実際の調理には自信がなくても、野菜を切る、茹でる、皮をむくといった単純な作業であれば取り組める仲間がいます。またこうした準備の体験で、野菜や肉の調理に関して基本的な知識を得ることは、将来の自立生活に役立つことも期待出来ます。というわけで、現在は新しいお弁当のメニューを開発しながら安全で美味しい食を届けようと頑張っています。次は同じビル内にある他の会社さんで働く方たちにも、お弁当を注文していただき届けようと、営業活動を始めたところです。

ただ、いつもなら春には新たに通所を始める方が増えるのですが、今年は数も少なく、なかなか継続ができる方がいません。自分のニーズと体調管理の折り合いがつかない、あるいは就労継続支援B型は社会で働くのと比べたら「これでは物足りない。自分はもっとやれる」と思う方も多いようです。「それいゆ」が大切にしているのは、メンバーたちが自分の“核”になるものをしっかりとさせていくことです。どんなに努力しても出来ないし、変えられないものがある一方で、長い時間を経てゆっくりと変化するものがあります。働くことは大事ですが、何のために、どのように働くのか考えることはもっと大切です。個人の尊厳が簡単に踏みめにじられてしまうような労働の状況が、簡単には変わらないことを思うと、そうしたなかでも自分を見失わずに生きる力を蓄える必要を感じます。「トラヴァイユ・それいゆ」では、引き続きそうした社会の状況にあっても自分であり続けるよう、メンバー達の力を引き出していく支援に力を入れていきたいのですが、手っ取り早い収入や結果を求める人も多いという現実があります。

4月にはふたつの大きな出来事がありました。ひとつは、かねてから取り組んできた身体に対する働きかけである“ソマティックス”のワークショップを開催したことです。担当されている平澤さんの師匠であるハンナ先生が日本へいらっしゃる、しかも平澤さんが「それいゆ」で行っているソマティックスの様子を見たいと話されているというので、それとは別に専門職向けWSの開催も具体化していきました。詳細は平澤さんによる記事をお読みいただければと思います。もうひとつは4/24-25と京都の寂庵にて、少女と若い女性を支援の対象とする新しい試み「若草プロジェクト」のキックオフ研修会が開催されたことです。私は昨年に女子刑務所のあり方を考えるシンポジウムに参加したことをきっかけに、厚労省におられた村木厚子さんに声をかけていただき、この取り組みを知りました。法人は2002年の開設以来女性の援助を行ってきましたが、対象の低年齢化現象が起こっています。現行の制度は、こうした若年女性の抱えるニーズを汲み取れるものになっていません。今後「若草プロジェクト」では、当事者の困難を知り、新しい支援の枠組みをつくりコーディネーターを養成するなど、多岐にわたる試みを検討中です。私はこれまでの臨床と実践を生かし、この取り組みに対してどのように貢献できるかを考えています。

そして5月には、オーストラリアへ1週間の視察と研修へ出かけました。前半はシドニーにおける薬物依存のリハビリ施設、後半はメルボルンにて重複障害への援助と専門職教育、若年層への生活支援、家族プログラムなどについて視察しました。3年ぶりの訪問で大きく変わっていたのは、これまで薬物依存の代表であったヘロインに代わって、覚せい剤の依存が急激に増えているということでした。オーストラリアはおよそ20年前に、違法薬物の単純所持と使用について罪に問うことを止め、代わりに地域生活に根ざしたリハビリテーションを重視する政策に方向転換をしました。薬物依存に対して厳罰化で臨むことは、当事者をさらに追い込み、病いを個人の失敗とみなすことから、逆に回復を遅らせてしまう。むしろ何度失敗しても、本当に薬物を止めたいと思った時に、いろいろな選択肢が用意されていることが、結果として「傷つきを最小限度にする」＝ハームリダクションと考えるのです。もちろん政策の転換に関しては、多くの反対意見もあったと聞きました。しかし薬物依存を他人事と済ませないほどに、オーストラリアではC型肝炎や



シドニー市内にあるリハビリ施設WHOSにて、北海道ダルクの森さん

エイズ感染が重要な社会問題となっていました。TAX USER(税金を消費する人)からTAX PAYER(納税する人)へ。人は適切なケアとリハビリテーションを受けることで変化する存在であるという信念を、社会で共有していくことができる。日本では有名野球選手の覚せい剤使用による逮捕が毎日のようにニュースで取り上げられていましたが、どれもひどい扱いです。興味本位、誹謗中傷ばかりで、どのように回復していくのかに焦点をあてるものはほとんどありませんでした。

先の「若草プロジェクト」では、家出し風俗で働く少女達は援助するに値しないと考える社会にも大きな疑問を向けていくことになります。また薬物依存への対応や少女達への援助の基底には、社会では許容されない犯罪行為を犯した人あるいは逸脱と見える人の背景には、様々な困難があり、それは社会の構造が生み出していくものであるという考え方があります。彼らも私達と同様に社会の一員であり、そうした人たちを排除するのではなく包摂する社会を創っていかねば、本当の変化は起こらない。今回の視察で、改めてそのことを強く感じました。相変わらずのバタバタとした毎日のなかで、色々な事を考えさせられています。

新しいスタッフを紹介します。

みなさん、はじめまして
時永真人です。簡単では
ありますがご挨拶と自己
紹介をしたいと思います。
名字、名前の漢字から、
私自身どこか堅苦しい印
象がありますが、名字の
時永（ときなが）は北海
道では珍しいとよく言わ
れ、祖先が北陸地方出身
と聞いています。名前も真人（まひと）と一度
で読んでいただいたことはほとんどありません。
父親が“人生を真っ直ぐ歩むように”と万葉集で
詠まれている句からつけたそうですが、両親の
思いとは裏腹に随分くねくねと曲がってきた人
生だなと感じています。



札幌市内の高校を卒業後、家族の心配や反対
を押しのけ、和歌山に住むと決め行ったことは、
先人が言う若気の至りだったのでしょう。最初
に悩んだことは“方言”でした。コテコテの関西
弁にどこか憧れはあったものの、日常生活で使
われている和歌山弁に「・・・？」と慣れるの
が大変でした。他は、気候や少しの慣習の違い、
学業と仕事の両立、人との関係と、当時のこと
を懐かしく苦くもある思い出として残っていま
す。

また、その中で恩師が言ってくれた言葉を今
も時々思い出します。それは「自分の中の可能
性を信じること」です。自信を大きく失くし、
自分がとてもちっぽけな人間に思え、泣いたと
ころでどうにもならないと空虚感でいっぱいと
なったときも、この言葉が心の中で励みとなっ
ていたのだなと感じています。

そして、病棟や外来勤務、介護保険の認定調
査員、訪問看護の経験を経て、この4月から「そ
れいゆ」で働くことになりました。これも何か
の縁であり、みなさんとの出会いに感謝しなが
ら、また、これから出会う方々たちとの出会い
を楽しみに日々過ごして生きたと思います。おっ
ちょこちょいで、慌てん坊な一面もある私です
が、これからよろしく願い致します。

「はじめまして、なつきです」

夏来（ピアスタッフ）

2016年4月1日より事務スタッフとしてリカバ
リーにお世話になります夏来と申します。賛助
会員の皆様・関係機関の皆様、どうぞよろしく
お願いいたします。

私は14年前に当事者として大嶋さんに出会
い、何度も助けられながら、何とかここまで生
き延びて来ました。「それいゆ共同作業所」時
代の初期メンバーとして投稿して以来のニュー
スレターですが、原稿を書く作業は以前と変わ
らず本当に辛い。ここは全く成長していません。
とても憂うつな気分になり1日中とらわれま
す。

そんな私でも、長い年月をかけて、社会の中
で何となく普通に近い生活をしていく事が出来
るようになりました。今回、事務スタッフとし
て声を掛けてもらい、お世話になると決めてか
ら自分に何が出来るのか考え【他のスタッフさ
ん達が少しでもメンバーと関わる時間を増やせ
るように、経験を活かし事務的なことは私が一
手に引き受ける】という意気込みを持って働き
始めましたが、そんな思い上がりは一瞬でアッ
という間に消えました。今はスタッフさん達・
メンバー全員の力を借りながら毎日、何とかこ
なしているのが実情です。ここにいると想定外
の出来事が当たり前になります。毎日とにかく
目まぐるしく時間が過ぎて行きます。

「今の私」は自分が思い描くような仕事が出
来ず、それはもう大変です。片付けたい場所・
書類が山盛りでんこ盛りですが、片付け始め
ると止まらなくなる病を持つ“とても面倒な人”な
ので、少しずつ業務の合間をみて取り組むとい
う訓練をさせて頂いています。この職場には、
困まったことをその日のうちに相談・解消出来
る優秀なスタッフ達が居るという利点がありま
す。毎日利用しまくりです。結局「私が」では
なく、「私を」サポートしてもらっています。
まだ不慣れで失敗も数知れずという状況ですが、
数年先には当初の意気込みを本物に出来るよう
に、ほどほどに頑張っていきたいと思っています。

＊この半年の間につながった仲間たちに原稿をお願いしました。テーマは「今の私」です。

「今の私」

by えりこ

私は、去年の十一月から「トラヴァイユ それいゆ」に通い始めました。それまで、対人不安が強く、外へ出て人と話したり、一緒に行動することがうまくできませんでした。今でも、人と接することは、あまりうまくできませんが、通所されているの人達のおかげで、少しずつ慣れてきているようです。

最初、「それいゆ」に行ったとき、梶間さんが笑顔で迎えてくれました。緊張で張りつめていた気持ちが、少しだけ和らぎました。梶間さんから、「それいゆ」のことについて、いろいろと教えてもらい、翌日、区役所で手続きをしてきました。

今は、月・火・金の三日間だけ通っています。月曜日はミーティング、体操、掃除。火曜日は、創作。金曜日はヨガです。

通い始めてよかったことがいくつかあります。

第一に、自分で働いて工賃をいただいたことです。生まれて初めての経験でした。七百五十円というお金でしたが、私にとっては、とても価値のあるお金でした。今も大事にしまっています。

第二に、お弁当です。前日に自分たちで野菜を切ったりして、下ごしらえしたものを食べるのがとても楽しみです。

これからの目標は、「それいゆ」に毎日一人で通えるようになることです。今はまだ母に送り迎えしてもらっていますが、一日も早く一人で通えるようになりたいです。

「今の私」

by うぶ

それいゆに来て4ヵ月が過ぎました。前の施設で薬が止まらなくなって、もう自分の力ではどうしようも出来なくなり、仲間の中でもどうにもならないところまでいってしまっていました。

前の施設では周囲全員が敵だと思い反発し誰に対しても攻撃的でした。しかし「それいゆ」に来て180度位(笑)変わったように感じます。

女性だけの施設というのが大きな理由かもしれませんが、大変自分勝手な意見ですが、男性に依存したり甘えたりしている女性に反応していた私は、その共同生活が本当に苦痛でした。誰に対しても優しく接することが出来ず、そんな自分が恥ずかしくもどかしく悲しかったです。どうして人と普通に接することが出来ないのかわからずにいました。全部人のせいにしていました。

「それいゆ」に来て女性の優しさにたくさん触れることが出来ました。それが不自然ではなく、今まで怖かった女性に優しくされることを自然に受け入れることが出来、色々な部分で癒されることを知りました。

ただ、施設長に『このままでは薬は止まらないよ。』と言われまた私はどうしたらいいのか、何をしていけばいいのかわからなくなりました。話の中で【人に共感する】というのが最終的に出ました。私は今まで自分の事にしか興味が無く、自分最優先で生きてきました。だから人に優しく思いやりを持って接することが出来なかったのかと少し感じる事が出来ました。

「それいゆ」では皆個性的な特性を持った仲間がたくさんいます。でもそれぞれ皆本当に優しく楽しく接してくれ(それもわざとらしくなく一言大丈夫？と声をかけてくれたりすることです。)ここでは自然体で居ることが出来ます。この中で私は何をこれから学んで経験していけばよいのかはまだ手探り状態ですが、ぜひこのチャンスを生かしたいと思っています。断薬とは別に、たくさんの事をきっと学べたり感じたりすることの出来る場所だと思っています。クスリを止め続けるなかで、仲間の優しさのなかで優しさを学び、自分自身が本当の意味での優しい人間になりたいと思います。

ワークショップ報告：エレノア・クリスウェル・ハンナ氏を迎えて

平澤 昌子



エレノア・クリスウェル・ハンナ氏を迎えて、4月22日(金)と23日(土)、NPO法人リカバリーにて、ハンナ・ソマティクスのワークショップを開催しました。エレノア先生は、今回が初来日です。私がソマティクスを教える機会を頂いている「それいゆ」を是非、実際に見てみたいという先生の希望で実現しました。

「ソマティクス」とはこころとからだのつながりを探求する学問であり、「ハンナ・

ソマティクス」は理論に基づくこころとからだのエクササイズです。日本のメンタルヘルスの分野では、こころと密接な関係にある「からだのワーク」はまだまだ受け入れられているとは言えません。こころのことは心で、からだのことは身体でという、心身分離の考え方が主流です。今回のワークショップ開催にあたっては、ソマティクスが、札幌でどのように受け入れられるか、そして今後の可能性を確かめたいという気持ちもありました。

ワークショップは、一日目は理論講義、二日目は午前中にエクササイズの体験、午後は体験を深めるという目的がありました。一日目の理論は少々難しく感じた方も多かったようですが、二日目の体験で、部屋の雰囲気がリラックスしたムードに変化しました。お昼はそれいゆ特性弁当を食べながら、皆さん和気あいあいとした感じでした。午後は前日の理論を少しずつからだで理解しながら体験できたかと思います。ワークショップのはじめに姿勢のアセスメントをしましたが、ワークショップの終わりには、皆さん、姿勢だけでなく表情や目の輝きなどの変化に気づき、驚きの声があがりました。

ワークショップ終了後、参加者の方々からメールでたくさんの感想や質問を頂きました。「からだを動かしてその感覚に気づく・・・これまで考えたことも体験したこともなかった」「メンタルヘルスにソマティクスを生かすにはどうすればよいのか」「もっとソマティクスについて知りたい」といった声を聞くなかで、ソマティクスの今後の可能性について、日本でもますますこのようなワークが必要とされることを感じています。今回のエレノア先生との時間は、私自身のソマティクスへの理解をさらに深めるものとなり、同時に、今後に向けて大きな励みとなりました。

最後になりましたが、それいゆスタッフの皆さま、ワークショップ開催にあたり、きめ細やかなご支援、ご協力をいただき、本当にありがとうございました。



「ワークショップに参加して」

檜垣 知里

「それいゆ」では長い間、平澤さんがソマトィクス・エクササイズを用いたボディワークのプログラムを担当してくださっています。残念な告白になりますが、メンバーそれぞれの回復を目指すこの場所で、ソマトィクスが何のために、どのような目的で取り入れられているのかという大前提、またその意味や効果についてぼんやりとしか知りませんでした。今回のWSで来日してくださった講師、エレノア先生から直伝のソマトィクスを学ぶことができたのは、私の中に山ほどある“要勉強”のカテゴリーに埋まっていた案件に着手でき、とても贅沢な時間となりました。基本理論に触れることで、ぼんやりとしていたものに輪郭がついていく感じ、なるほど、そうだったのか、と思うことが満載でした。私は自分の身体感覚に鈍感なほうだと自覚していましたが、身体の内側から自分の体の状態を意識することや、感じようとする試みそのものを習慣化していないということだったのではないかと思いました。それいゆでは、毎朝のミー

ティングでメンバーからその日の気分や体調を報告してもらいます。自分の身体、持ちのありように対してとても繊細で敏感な感覚をもって、いるメンバーが多く、皆の報告を聞いていると、感心するほどに身体の内側から感じる自分の状態を受け取って表現する力のある人が多いです。こうした力も、ソマトィクスをはじめ多様なプログラムや支援を使ってメンバー自身が育んできた力なのかと思うと、それいゆが実施しているプログラムのひとつとしてのソマトィクスの意義をよく理解できたように思います。筋肉は日々のストレスや出来事、それに伴う感情の変化にさらされる中で常に収縮が起きているために、収縮した状態をリセット＝ゆるめる、というケアが重要だということ、トラウマの体験はこれが一筋縄ではいかないような深刻な影響を身体に与えるということも改めて知りました。それを自分の知識としてわきまえておくだけでも、目の前にいる人や自分の身体は、十分に労われ、そして大切に扱われるべきもの、という思いがどっしりとしたものになったような気がします。エレノア先生、平澤さんに心から感謝です。

「職場にお弁当をお届けします」

トラヴァイユ・それいゆでは、カフェにて毎日利用者さん向けのお弁当を作るほか、この春から札幌刑務支所の職員向けにお弁当を作りお届けしています。昨年、北海道障害福祉課へお弁当を配達する事業に参加した経験が、様々なところで生かされています。メニュー作りはスタッフが行いますが、今春からは前日に野菜のカット、下茹でなどの下ごしらえを新たにメンバーさんのお仕事として発注することで工賃が支払えるようになりました。

ランチは3種類。レディースサイズ350円(写真A)、日替わりランチはご飯少なめ470円、普通500円(写真B)で提供しています。前日15時までに申し込みいただくと、翌日の12時までに配達いたします。また、1週間前には翌週のお弁当メニュー表をお配りしますので、それをご参照ください。毎週水曜日には「ひかり工房」さんのパン(就労継続支援A型、B型、移行支援の事業所)とパスタなどがセットになった「イタリアン弁当」の日になっています。なお、最小個数は3個から、また配達可能エリアは車で20分圏内とさせていただきます。6月からは「はたはた事業」が始まり、カフェ裏にある畑で収穫した無農薬野菜がお弁当に使われます。

毎日お仕事に頑張っている近隣の会社さん、病院や介護施設の職員さん、あるいはお母さん達の小さな集まりなど、いろいろな機会に「カフェそれいゆ」で作る安全で美味しいお弁当はいかがでしょう。関心をお持ちいただけましたら、担当の檜垣までお電話(011-374-6014)までお電話をください。具体的な相談をさせていただきます。みなさま、どうぞよろしくお願いいたします。



A



B

「大切な仲間が逝ってしまいました」



2004年～2012年まで「それいゆ」で働き、その後久里浜医療センターにて精力的なお仕事をされていた小松祐子さんが、5月21日午後12時14分、ご逝去されました。8月には出産を控えており、可愛らしい男の子と一緒に天国へ召されました。突然のことで本当に言葉がありませんし、どれほど心残りであったかと思うと胸が潰れる思いです。

大嶋は21日午前中に危篤の知らせを受けてすぐに駆けつけましたが間に合わず、パートナーである高橋陽介くんの計らいで、特別にお二人に対面することができました。

「それいゆ」では5/23からお花と遺影を飾り、どなたでもお焼香いただける場を設けたところ、毎日のようにお友達、仕事仲間などが訪れて、お花が絶えることがありませんでした。小松さんのご葬儀は横須賀にて終了しましたが、遠方で伺えなかった方たちも多かったため、これまで親しくおつきあいくださった方たちにお別れをしていただく機会を作ろうと、6/8(水)に「小松さんを偲ぶ会」を開催いたしました。多くの方にご参列いただき、心よりお礼を申し上げます。今年5歳になるお嬢さんと高橋君の暮らしを、みなさんが心配し、応援する姿が印象的でした。

「それいゆ」は大切な仲間を失いましたが、小松さんの思い出と一緒に、この先も進んでいきたいと思います。



「小松さんへ」

by はるか

まりに突然のことで、何を申し上げたらいい
.....

松さんの肉体はもうなくなってしまったので
ね。でも小松さんの魂は今ここにきてくれて
ると信じて、小松さんへ感謝を伝えます。
小松さんとの出会いは約10年前でした。セ
ターで見かける厳しそうなスタッフ、それが
松さんの第1印象でした。センターに通うよ
になっても酒が止まらず、ステップハウスへ
所。ステップハウスで酒盛りをしている所に
のスタッフと駆け付けてくれましたね。酔い
れた仲間を毛布で包み、介抱していた所を覚
えています。私は窓から逃げ出し、「ひろみさ
怪我するわ〜」とだけ言い、追い掛けて来て
くれませんでしたね。

小松さんはいつも「やれやれ」と言った顔を
て、叱ることをせず、黙って見守ってくれて
ました。リカバリーハウスに入所すること
に、小松さんの愛情に、命を守ってもらいま

ハウスからも逃げ出し、引っ越しを繰り返す
ようになり、アパートで食べ飲み散らかした残
骸を片付けてくれ、ガスの通っていない冷たい
水で大量の食器を黙って洗ってくれましたね。
つらい時、苦しい時、怒りや恐れに潰されそう
な時、ただその場にいてくれるだけでよかった
のに.....八つ当たりばかりしてごめんなさい。

その場にいるのが当たり前だと思っていた私
はなんてバカなんでしょう。

小松さんと過ごした時間の中で、本当に大事
なものは目に見えないのだと学びました。安心
感や信頼、絆.....小松さんと同じ時間、場
所で過ごせた私は幸せでした。

ありがとう。もう1度会って話がしたかった。
もっと早くお礼を言っておけばよかった。

小松さんがくれたものを大事に、生きていき
ます。

私は酒を止めたら、臆病で、不器用で、格好悪
くて.....ヘタレそのものです。でも、このま
ま、その場で足を踏ん張って、その場に居続け
ます。

「こまっちゃん、大好きだよ！」

by S

私はまだ、小松っちゃんの事を受け止められずにいます。

7年前、母と共に札幌へ来た時、雪に足を取られて小松っちゃんの車の下へ滑り込んでしまい、慌てさせてしまいました。「リカバリーハウスそれいゆ」に入所後、万引きが止まらずに警察がハウスへ来てしまった時、一緒にお店に行つて謝罪してくれました。

スタッフの方なのに「皆に小松っちゃんて呼ばれてるからそれで良いよ！」と言ってくれました。何時も対等な関係で居てくれました。

「こうなっても、小松っちゃん知らないよ～」と言われても、私は失敗を繰り返して落ち込み、やらす度に自腹で外食に連れて行ってくれました。誕生日には好きな食べ物を予測して作ってくれました。注意する以上に頑張った時は褒めてくれました。小松っちゃんに言われて、自分が醜形恐怖症だと分かりました。「好きだよ～」というと、ニコニコしながら「ありがとう」と言ってくれました。

小さいのに遅しくて、とても愛情深い人でした。居てくれるだけで安心出来ました。怒りを初めて出した時の「怒れるようになって良かったね！」という言葉と、今より経済的にカツカツだった入所時に「この生活は何時か身になるからね。」とハグしてくれた事、凄くよく覚えています。他にも思い出す事は山ほどあって、書いてて泣いてしまいそう。

本当に、本当に沢山の愛を有難う御座いました。大好きだよ、小松っちゃん。

「小松さん、ありがとうございます。」

by しろ

小松さんには、私が施設に繋がった最初の時期に、私が、自分の問題や生活の仕方、世の中の常識やモラルなどを、今よりずっと分かっていない、しっちゃんめっちゃかな頃に、お世話になりました。

人が怖くて、それいゆに行くのが嫌で、それをやらないと回復しないから、嫌で堪らないけど、やっとの思いで行ってハウスに帰ってきて、小松さんに『ちゃんと、それいゆ行ってきたよー』って、報告したら小松さんがハグしてくれて、それが頑張った時にお母さんが愛情こめて抱きしめてくれるみたいな感じで温かくて、安心感があって、嬉しかったのを覚えています。小松さんの愛情が、ほんとうに有難かったです。

また、どこかで会えたら良いなと思っていたのに、叶わなくなってしまったのが残念です。小松さんのご冥福をお祈りしています。

大変お世話になりました。

「こまっちゃんの思い出」

by とも

初対面は10年前。リカバリー入所前の面談でした。「ここで勉強して将来は施設でもつくろうと思います！」と話す私に「がんばって！」と言ってくれた時のこまっちゃんの半笑いをはっきり覚えています。

入所して2カ月たつ頃、ドライバーで金庫こじ開け事件を起こしました。薬を抜いて退院後、メンバーには話したくもないと言われ、大嶋さんは敬語モード。それいゆとNA以外はパーカーのフードを被って部屋にこもってる私に、こまっちゃんがあだ名を付けてくれました。「ねずみ男」です。息をするのも辛かった日々に愛と許しをありがとう。

私の過去の話でこまっちゃんが泣いちゃうこともありました。当時は反応に困ったけど、大変だった自分のために泣いたり、仲間のために心が痛かったり、人の中で生きることあの時のこまっちゃんの気持ちもわかるようになったよ！したいこと、してあげたいことがいっぱいあったんだろうな。こまっちゃんからもらった私の中にある何かが、誰かの何かになっていけばいいな。

寄付をいただいた方々(2015.10.24-2016.4.30 敬称略)

青柳 百合子	上野 千鶴子	岡田 澄恵	木村 悦子	坂上 京子	坂田 誠
清野 彰彦	関口 由紀子	豊巻 絹子	平山 実	望月 和代	森田 由紀子
山川 友子	横井 久子	小松 知己	横山		

みなさま、本当にありがとうございました。